

---

# 緋天日蝕 狂乱ノ蒼月

シクヴァル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋天日蝕 狂乱ノ蒼月

### 【NZコード】

N7271Q

### 【作者名】

シクヴァル

### 【あらすじ】

【狂氣の月】世界に点在する神々の物語、それが今漫食されている。一つの神話により生み出された『悪』は他の神話をえ飲み込んでし、ある者は染め上げられ、またある者は抵抗し。だが、それをせき止める両手は余りにも小さく

### 【嘆きの太陽】

## 三十五年越しの舞踏会

死んだか

この状況下だ、何が起っても不思議ではないが

どうだ、お前はまだ生きたいか？

あえてくだらないなことばかりしてみよいんだ。

国の繁栄を第一とする人間を右翼、世界平和を第一とする人間を左翼と呼ぶ。語源はフランス革命時、旧体制の維持を目指す派閥を議長から見て右、新体制の確立を目指す派閥を左に置いた事から。保守、革新とも呼ばれる。

右翼は国、または国民の保護のために意思を決定し、繁栄のためになら殺し合いも辞さない。逆に左翼は世界を平和に保つために行動するが、現場にいる人はおぞなりにされる。両者の中間は中道と呼ばれるが、現代の国家運営において中道を保つことは不可能に近い。

また、日本のインターネット場ではネット右翼、ネット左翼が汚い罵り合いを繰り広げる事がある。それぞれ日本大好きな自己中と日本大嫌いな自己中で構成され、「はやぶさ帰還神ｗｗｗブサヨ憤死ｗｗｗ」とか「ＧＤＰ３位転落ｗｗｗルピウヨ涙拭けよｗｗｗ」とか言い合っている。

間違つても現実の右翼左翼とネットの右翼左翼を一緒にしてはいけない、根本的な存在意義が違う。

日本人は何か不満な事があつても怒らずに黙つていたりさりげなく指摘するのを美学とするが、大部分の外国人はその意味がわからぬ。ほとんどの場合はその場で怒つてクレームを出し改善を求める。店側にとつても言つてくれれば対応できるし、問題点としての情報も手に入る。笑顔で帰つてブログで不満をぶちまける日本人にはいつしか『静かな爆弾』サイレントボムという異名がついた。

ただ、当の日本人は「んな短気なマネできるかボケエ」と思つていて、それを曲げる意志は無い、その必要も無い、ぶっちゃけ騒がれると迷惑だ。

### ドライブルールの話

韓国のドライバーは危機回避に定評がある。というのも彼らは後方への注意を一切断つているからであり、結果前方からの脅威に対しう信じられないくらい強くなつたからである。急旋回急ブレーキ当たり前、信号など無いも同然、そこに隙間がある限り彼らは直進し続ける。故に回避技術が超一流となり、どんなものに対してもさつとかわしてしまつ。

本人は「事故つてないからいいじゃん」だが、世界からどう思われてるかは『お察しください』

つまり、どんなものであれ、絶対に相容れない二つといふのは存在するのである。

「目が覚めたか。どうなったか覚えているか？」

体育をやっているクラスの掛け声が窓ガラス越しに響いてくる。鼻孔には薬品独特の臭いが入って来て、ここが保健室である事を伝え

ていた。

視覚が戻ってきて、まず見えたのは赤色の髪と紺色のスース。ここは学校、どう考へても教師だ。ほやけてよく見えないが、女性らしい。

い。

「高天原高校2年情報科A組、出席番号24番の白兎 大悟。ここまでは大丈夫だな？」

今言われたプロフィールが自分らしい。少し考へてみればそうだった氣もする。

ただ、何か妙に記憶が混濁していた。

母、兄、出雲

逃げる。何から?

「体は大丈夫そうだな」

女教師に助けられつつ上体を起こす。そこによつやく意識を完全に取り戻し、記憶も完全に復旧する。相変わらず意味不明な単語は浮かんでいるが。

「つ……」

自分がいるのは保健室だと視覚が確定させていた。真横にいるのは保健医ではなさそだが、白衣の教師は見当たらない。

その代わり、女子生徒が1人、窓際で壁にもたれ掛かっていた。肩に届かない短髪の髪は少しだけ焦げ茶がかり、ぱっと見の身長は150後半から160前半。襟章の色から判断すると2年、同じ年だ。制服であるブレザーに邪魔されているが、体に相当量の包帯が巻かれているようだ、そのせいもあってか見るからに不機嫌な顔で、睨み付けるようにこっちを見つめている。

しかし、それよりも目立つものが横に立てかけてある訳で。

剣、ぶつとい大剣だ。黒と紫で着色された左右対照の両刃剣が女子生徒左横に鎮座していた。

一通り室内を観察し終えてから時計を確認、午前11時26分。

「見えるか？」

「まあ……なんとか」

赤髪の教師が覗き込んでくる。見事な赤色の長髪だが染めてる風は無く、よく見れば目も赤色、ついでに言えばだいぶ若い。

この田立つ髪はよく知っている、国語のある日は毎日教室までやつてきていた。

「私はわかるか？」

「えー……榎原……先生」

「そうだ、さかきばり 榊原 ひよし 日依」

国語教師だ。年齢不詳の居住地不明だがその田立つ髪色と若い外見から男子生徒に人気が高く、彼女の授業は出席率が総じて高いという。肝心の授業は、やや現代人の語学レベルを把握できていない感がある、どう見ても難しそうです本当に。

「ちよっとこれ握つてみる」

「？」

お札が一枚出てきた。

表面上にタニシがのたくつたような文字が書いてある紙幣ほどの和紙だ。国語教師榊原はそれをなぜかピンセットで摘んで差し出してきている。

「……」

掴む

バチイ！…と、電流の走ったような衝撃が来た。

「ふむ、成功か。喜べうまくいったぞ」

「いやその前に今のやつ説明欲しいんですけどねえ……」

勢い余つてベッドから転げ落ちた。威力は対暴漢用スタンガンほどあつたどうか、痛い。

何を喜べばいいのかと榎原を見れば、こっちに言つたのではなく窓際の女子生徒に向けて言つていた。当の本人は不機嫌な表情を崩さないまま右手をひらひら振つて対応。

いいから早く話終わらせ、と言いたいようだ。

「とりあえず……何がどうなつてこうなつたんです？」

「ああ、それに関しては少し長くなる上に信じて貰えるか怪しい」と、榎原が自分、白兎大悟を指差す。性格には腹部、つられて下に視線を移す。

「一度、刺されて死んだんだ」

制服に大穴が開いていた。

「…………」これは誰に弁償させりやいいんですか？」

「案外冷静だな」

「そりゃいきなりそんな事言われてもねえ……」

話がぶつ飛びすぎているというかファンタジックというか。ここは地球であり自分は人間だ、刺されて死んだらそのまま火葬されるしかない。

「信じないならそれでもいい。だがこちらとしては君は貴重なケースでな、まず話を聞いて、できれば協力して欲しい」

「何に……」

「詳しい話は放課後にじよつ。毎休みまでここで休んで、授業が終わったら図書資料室まで来てくれ。それまでアレに質問してもいい

言って、女子生徒を示した。相変わらず不機嫌だ、近付ける気がしない。

「じゃあ私は失礼する。放課後に図書室の小さい部屋だぞ」

榎原日依がこちらに背を向け、保健室から出ていく。取り残されたのは大悟と女子生徒。

「…………」

「…………」

「じつすじやっここの空気。

「…………」

5秒程沈黙していたら、女子生徒が先に行動を起こした。大剣は放置して壁から背を離し、ゆっくり歩いて近付いてくる。さつきまでの不機嫌な顔はいざこかへ消え去り、不敵な笑顔を形成、不機嫌は嫌だがこれはこれで怖い。距離1mほどで停止したが、ベッドに手をかけてぐいっと顔を寄せてきた。

「私の事は知らないよね？」

「あ……ああ……」

にいまと口元を歪ませたまま問い、それから視線を下に移す。腹部と背中にはブレザーとワイシャツを突き抜けた大穴があり、素肌が見えている状態だ。体に傷は無く服だけが破れているので、変なファンションに見えていただけない。

「悪いけどこれは自分でどうにかしてね、今お金無いの」

「……なんつーか、自分がやりましたーみたいな言い方だな」

「まあね、あなたを殺したの私だし」

……なん？

「ちなみにおあいこよ？私、だつて左腕吹っ飛んだし」

ほら、と袖を捲つてみせる。包帯ぐるぐる巻きだったが、手首より

下5cmあたりが輪のよつに赤く染まっていた。ただ添え木のよつなものは無く、普通に包帯が巻いてあるだけだ。

「 もうへりつこちやつてゐけどね」

「…………何故へりつく…………」

「 せうこつもんだし。……てなんか疲れてない?」

「お前、うはもう少し常識といつものを考えた方がいい…………」

話が奇想天外すぎて脳がついていけない。もついつそれ屈やつてるとでも思つてしまおう、これはゲームの中だ、相手は台本通り喋つてるだけだ。

「話をまとめるべ。まず何らかの原因で俺が暴漢と化した」

「察しがいいわね。詳しく述べと自我が吹つ飛んだつていつか覚醒に近いけど」

「それを止めるためにお前はアレで俺を刺し殺し」

「ヤ行くまでに私がボコボコにされたのも忘れないでよ」

「…………じゃあ殴り合つた末に俺だけ死んで、世間一般が認知しない何か超常的な技術により蘇生したと」

「ひょりちやんがねー。どうやつたのかよくわかんない」

概ねわかつた、一般人のキャパシティを超えている

「じゃあな

「ちょっと待ちなさいな」

出でこいつと思つたら左腕を掴まれ、反転した体を再反転させられ  
る。やめてくれ、本能が叫んでいいのだ『関わるな』と。

「あなたには期待してるの、だつて私のこのケガ具合よ？ひょりち  
ゃんをして『歴代最強』といわしめたこの私を」

「それはどんな最強なんだよ」

「だから今からそれを説明するんじゃない」

それ長くなりそうか？ジャージに着替えて購買言つてからじや駄目  
か？

なんて言つたら怒られそつなので黙つておく。キチガイの話には頷  
きつつスルーがベストだ。

「オーケーわかつた、とりあえず君の名前を教えてくれ、お花畠な  
人として記憶しておく

ピキ、と青筋が立つた、しかし笑みは崩れなかつた。

「高天原高校2年C組芸術科、武内 氷澄」

「芸術科あ～～？」

青筋が2つになつた、しかしそれでも笑つていた。

これ以上余計な事言われる前に言いたい事言つてしまおうと思つたらしい、説明に移る。話してゐる間は大人しくしておこう、早く購買に行きたいし、何より怒つたらきっと恐い。

「世界は侵食されようとしているの」

「中一病か」

さつそく決意が折れた

「私だけてこんな恥ずかしい事言いたかないわよ！－」

怒られた

「……で、それを水際で食い止めるのが私達」

「具体的にはどう食い止めるんだ？」

「アレで」

大剣を指差す

さつきも言つたが太い剣だ、全長1mちょい、幅は20cmほど。

あれだけ大きいと重量もかさむだらう、案外怪力なのかもしれない。

「 イハやつて 」

何かを引っ張る動作をした。 イハ、 小型エンジンのスターターを引っ張るよつな。

「 斬り殺す 」

「 ……ちよつと待て間に入つた動作の意味は何だ 」

「それをあなたにも手伝つて欲しつてワケ 」

無視か

つまり何だ、異世界からやつてくる怪物？を始末する作業に加われ  
という理解でいいみたいだ。

「 じゅあな 」

「 イハ 」

今度は右肩を掴まれる。そこを力点にして女子生徒、氷澄さんと二  
度ご対面。

「どうも根本的に信じよつとしてないみたいじゃない 」

「お前はいきなり『アナタニハ不思議ナ能力ガアリマース』なんて言われて信じられるのか？」

「……無理ね」

「だろ？」

なら仕方ない、と背を向け、大悟から離れていく。帰つてよしとう事でいいんだろうか、なら購買行かせてもらうが。

一応気付かれないので、そろーっとドアへと向かつて、音を立てないよう開ける。

瞬間、視界が暗転した

「え……」

つい数秒前まであんなに明るかった、しかし、今はもう何も見えないほどに暗い。

「じゃあちょっと実体験して貰いましょうか、今後の為にもね

いや、違う、真っ暗になつたんじゃない。

夜になつたんだ、一瞬にして。

「『常夜』つていうの。ここにいる間は時間の進行が無いから毎ご飯の心配は無いわよ」

背後から軽い声が響いてくる。次いで何か重たい金属を持ち上げる音。

「ただ私が解除しない限り一生ここでさまよう羽田になるけど」

振り返る

右手一本で大剣を持ち上げる氷澄がいた

「……これが一件の侵食されてるってやつ……？」

「んー、ちょっと違うかな。ここには普通の空間に物質情報を依存してて、見えないけど常に存在するもの、いわば裏側ね。けどまあそういう解釈でもオーケーよ」

氷澄背後にある窓の外では星が輝いている。現代日本ではほとんど見れない天の川が見事にかかるおり、その右横にアンタレスを中心としたさそり座、更に右にてんびん座、春の大三角形。夏手前の南の夜空だと思われる、今は5月に入った所だから、季節は遵守しているようだ。

なお、グラウンドから響いていた掛け声は夜になつたと同時に一切聞こえなくなつていた。

いなくなつたのは彼らではなく大悟達の方だ、それくらいはわかる。

「ところで今からあなたをこれでぶつた斬る訳だけど、何か言いたい事はある?」

「いや……いやいやいやちょっと待てちょっと待て……。」

ギュイィイイイン!!という何かが高速回転する音。見れば大剣の刃に細長く黄色い光がまとわり付いており、所々ちらついている事から剣身の周りを高速で周回している事がわかる。

そう、まるでチョーンソーのよつな。

「大丈夫、既にあなたは私と同類だから、手足吹っ飛んだくらいどーつてこたないわ」

「でも……痛いんでしょ?…?」

「そりゃもつめちゃくちゃ

あ、まざいこの人キレイてる。

## 回天舞舞

「だありやああああ……！」

ドアから廊下にダイブしてそのままひっくまる。

ギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリ……といつ破壊音がコンクリートの破片をぶちまけた。

「おまつ……お前今完全に胴体狙つただろ……。」

「あら何の事かしりつふふふふ

横薙ぎに振るわれた大剣はまずベッドの仕切りを両断し、次いでコンクリの柱、木製の扉、壁、金属の棚までを美しささえ感じる真一文字で切断した。もし跳んでいなければその扉と壁の間に大悟が入っていた事は間違いない。

「大丈夫よ胴体だつて再生するわ。試した事無いけど」

「おいいい！」

捕まる訳にはいかない、何せさつきの話に従えば既に1回喰らって  
いるのだ。そう何回も脊椎断裂される言われはない。それにあの性  
格だ、「前後逆にくつつけちゃったー」とか必ずやる、絶対にや  
る、それでもう1回斬られるとかそういうオチに違いない。

逃走、逃走、逃走。

「大！！斬！！撃いいい！！！」

2秒で追い付かれた。

今度の犠牲者はリノリウムの廊下。コンクリートの上にシート敷いたら  
けなんだへーなどと考える暇も無く、崩れた体勢を直して氷澄に向  
き直る、逃げるのは諦めた。

「……今の避けられるのは予想外だつたわ」

「脳天直撃コースだつたぞ！？」

稼動し続ける回転鋸を引き抜き、ギチリと切つ先を大悟へ向ける。剣単体でも十分な殺傷能力があるだろうに、なぜ回転させようと思ったのか。

「アメノハバキリ。かつてスサノオノミコトがヤマタノオロチを切り刻んだ時に用いたものよ。切断力を高めるギミックがあるのは当然でしょ？」

先読みして説明してくれた、ぶっちゃけいらん説明ではあったが。

しかし

スサノオ？

何かスイッチが入った

「む……」

あれだけ怖かつた回転音が聞こえなくなる。別に真の自分が覚醒したとか一瞬で武道を修得したとかそんな感覚は無い。

これは恐らく『慣れ』だ。

それには氷澄も気付いたようで、突き出していった大剣アメノハバキ

りを引き戻し、両手に握り直した上で頭の右に構える。剣道における八相の構えに似ているが、切つ先は倒れて大悟に向き、姿勢も中腰並に低い。どう打つてくるかは不明だ。

「こきなりどうしたの？」

「ああ？」

姿勢は低く、視界は広く。

右足を少し後ろへ伸ばし、飛び出す体勢を整える。

距離、目測3メートル。

「ツだあ！――！」

大きく踏み込むと同時に手首を回して遠心力を入手、ただでさえ高い切斷力をさらに高めつつ袈裟斬りに振り下ろしてきた。

大悟から見て左上から右下へ、穴は左下だ、そこに潜り込む。そうしたら真横に氷澄の足が来るので、正面衝突のエネルギーをそのまま利用するべく足払いをかけ

「ツ――！」

跳躍により回避される。新体操選手も拍手ものの捻り込み1回転を決め、大悟後方に着地、そのまま真一文字に第2撃を入れてきた。

「今度こそもう……ツ――！」

大剣の柄を蹴り上げる

「た……あ……？」

持ち主の手元から弾け飛んだそれは窓ガラスを突き破つて外に消え

直後、キン、と耳鳴りがして、世界に明るさが戻った。

「…………」

「…………？」

解放された職員玄関から一際大きく体育の声が響いてくる。授業中のためそれ以外に目立つた音は聞こえず、氷澄の硬直も相まって、何か妙な静けさが大悟を取り囲んでいた。

今起きた事が信じられないほどばかりに驚きの表情で固まっている。左から右に振り抜いた体勢のままなので、変なオブジェといえばそう見えなくもない。

「…………」

「…………」

「……………何」

荒ぶる鷹のポーズで対抗するのはまずかつたか。

「なるほどねえ……」

硬直から立ち直り、武器を失った両手を見つめる。その後諦めたようには溜息をつき、大剣が消えていった窓へ歩いていく。

そこはさつき盛大に割れたはずだが、何事も無かつたようにしつかり窓枠にはまっていた。向こうの世界でどれだけ破壊しようがこっちには持ち越されないらしい、勝手に修復されるのか、根本的に違う世界なのか。

「あ……まあ……」

「ん？」

窓から外を見る。

いくら修復されるとこっても空中にいきなり現れた異物には対応できないようで。

アメノハバキリは進路上にあつたカカシの首を両断し、その先の植物資源科の畑に突入、何かの苗を盛大に掘り返していた。

「じゃあねー放課後ちやんと来なさいよー。」

氷澄が走つていった。

「……はあーっ…」

怖かつた

何なんだあの子

畠に飛び出してまず力カシを修復しようとしている。綺麗に切断された首部分に添え木を追加し、そこらにあつた針金でぐるぐる巻きにした、結果ぐらついているものの修理には成功、小首かしげてる力カシを作るとはさすが芸術家。そうしてから大剣を握つて力いっぱい引き抜く。

「に、やつー?」

転んだ。

「大丈夫かー?」

「つ…いいからアンタは昼食行きなさいよもうーー!」

今のはだいぶ恥ずかしかつたようだ、すぐ立ち上がりつて簡単に土を払い、飛び散つた苗を埋める作業に移る、頬には赤が混じつていた。

「昼食行きなさい言われてもねえ……」

白兎大悟はこの状況を無視してメシ行けるほど冷たい人間ではない、例え数十秒前に斬り殺されそうになつた相手だとしても、明確に悪意があつた訳では無し。

少し先にある昇降口で自分の靴を手に入れて、畠に降りる。

「……もしかして農作業とかしたこと無いのか？」

「土なんて…！練つて固めるためのもんじゃない…！」

それは粘土だ

全体的に土かけすぎ、というかほとんど埋没している。いちいち教育するのも面倒なので氷澄の横にしゃがみ込んで余計な土を払つていぐ。それを見て一時作業を中止した氷澄だったが、すぐに手を動かし始めた。どんな表情だったかはあまり見えなかつたのでわからぬ。

「こんなもんだろ」

一通り苗を元に戻し、立ち上がつて畠から出る。素人にしてはよくできた方だ。

「草なんて埋めときやいいと思つんだけどねえ……」

「光合成つて知つてるか？」

「そのくらい私だって知つて…わっ！」

また転んだ

「大丈夫か？」

手を差し出す。少しむづとしたが、掴んで、立ち上がる。

「あんた物好きねえ。マゾ?」

「……………どつちかと言われば

「」

「私に聞かれても

「……どうしてこうなった？」

「……」

「……」

## 順番に整理しておこう

まずジャージに着替えようと教室に帰り、机の上に新品の制服が用意されているのを発見した。一緒に残された書き置きから察するに、榎原先生が用意してくれたらしく、ありがたく袖を通して、他の生徒より一足早く購買へ。

それで…そうだ、購買前で氷澄と遭遇した。昼休み前の授業中なので鉢合わせする可能性は元から高かったのだが、食堂入口で綺麗に対面するとは思わなかつた。一緒に購買に行き、カツサンドか焼きそばパンかで少々の口論になり、うだうだやつてているうちに生徒が集まつてしまつたためほとんどランダムでパンを掴んで会計、脱出。

気が付いたら屋上でんぱんを啄んでいた。

「なぜ人間は選び放題な時に限つてこんなどうでもいいものを引き当てるてしまうのか」

「奪われたくない、独り占めしたいって思つてるから焦つてそういうのよ、独占欲が強い証拠」

なるほど

「それにまだマジじゃない、私なんかバターロールよ」

なるほど

「そつちの方が独占欲強いじゃん」

「それは、まあ…内蔵されたやつの特性といつか……」

内蔵？

「……仕方ないし、もひゅうと詳しく述べてあげるわ」

「あの超絶非科学的な話の続きか？」

「…………」

何か言いたそうな顔をしたが、否定はしなかつた、自覚はあるらしい。

溜息ついてバターロールを最後まで食べ切りお茶のペットボトルを開ける。

「結局ね、体は人間そのままなのよ。あるモノを体内、正確には脳に入れて、能力を底上げしてるの」

「へー」

「……なんか投げやりね」

「呆れたつづーか慣れた」

いきなり夜になつたと思ったら息つく間もなくチューンソー一ぶん回されたのだ、今更何言われようが動じるつもりはない。驚かせたければそれ相応のネタを持ってきて頂きたい、例えばTOD2のバルバトスとアナゴさんは中の人と同一人物だと、あのNEAとこのネアは同一人物だと、グラハムエーカーとミスター・ブシドーは同一人物だと。

「あなたはつい数時間前に神となりました」

コーヒー吹いた

「中一病かつつーの！！」

「いやこれが真実だから面倒でねえ……」

ははは、と乾いた笑いが氷澄から漏れる。

「神様を降ろしてきて体に入れるの。それをジェネレーターにして魔法みたいなの使つたり、再生力をカンストせたりする訳。どういう能力が出るかは入れた神によるらしいけど」

「……人体の限界はどうなつてる……」

「肉体の耐久力はあんま変わらないけど、細胞の増殖限界は無視できるらしいから寿命は短くならないって……大丈夫？」

「今更何言われても驚かないと思つたんだがなあ……」

天を仰ぐ、空は青かつた。

神か、そんなもんにはなりたくないなかつた。その地位を手に入れるために世界と戦つた少年は志半ばで倒れたが、奥さん、案外簡単に手に入るみたいですよ。

で、どうなんの？心臓発作で人殺せるようになる？

「いきなり特殊な能力が手に入る訳じやないわよ、術に関しては伸びやすい特性が付くつてだけ。特化するんじやないから訓練すればたいていどうにかなるけど」

「チョーンソー回したりか？」

「それは剣の能力」

私自身の力じゃないのよ、と言いつつお茶を一口。何か気に食わなかつたらしくパッケージを睨み出した。

「やつぱりさあ、ボトル詰めの緑茶売るより茶葉とお湯売った方がいいこと思つのよ」

「ペットボトルの存在意義に真っ向から喧嘩売つてる主張だな」

「利便性は認めるけど敢えて緑茶を詰める意味がわからないわね、ファンタとか「一ラ」とかそれ専用のやつでいいじゃん」

「最近の若者は急須で入れる緑茶の味なんてほとんど知らないんだよ」

若者のする会話ではないと思つ。

「……まあ、内蔵されたのが武神だつたりすると基本戦闘力も高く出るみたい。…ぶっちゃけ何が入つたかわかんないけど」

「わかんねえの？」

「だつて緊急事態だつたし…」

氷澄が少々言い淀む。

色々あつて忘れていたが、大悟がこんな奇想天外な事に巻き込まれる根本的な原因を聞いていなかつた。よくわからないがかなり暴れてしまつたようだし、氷澄だつて出会い頭にチエーンソーザイイインした訳では無いだろ？。

いつものように登校した白兎大悟は待ち構えていた大妖怪に襲われその衝撃で真の力が……無いな。

「緊急事態つてのは、隠岐の大天狗が攻め込んできたのよ。日本三大妖怪に数えられてる奴でさ」

「つーひおおおおいーー！」

「え？」

有つた、有つたわ。

「……そいつは正面口から堂々と侵入してきて、宣戦布告するかの如く生徒1人に襲い掛かったの。その後で常夜展開してスクランブル、わかつてるとと思うけど生徒1人つてのがあなた」

あるんだなそんなベタな展開とか思ひ、天狗に刺されて本当の私デビューーー！おいやめい。

いや、殺したのは氷澄じやなかつたか？

「そいつは？」

「私が着いた頃には死んでた。それで、代わりにもつと厄介なのがいたつてワケ」

なるほど、そこで暴走開始したらしい。ビーツで記憶が無い訳だ。

「後は私とあなたのタイマンよ、ギリギリ勝つたけどね」

「暴走した理由は？」

「そんなすぐわかつたら苦労しない」

理由未だ不明と、将来的には解明される言い方をしたが、暴走なんて頻繁にするもんでもないだろ？、早いうちには特定して頂きたい。

「まあ…」の学校は「こういう事やるために作られたから、誰がやられても結構な確率でこうなった気もするけど」

「え？」

「素質持つた生徒が集められてるの、逆指名されて入学したでしょ」

そういうえばそうだったか、確かに3年の身体測定が終わったあたりで教師に呼び出され、あれよあれよと進路決定したんだった。おかげで受験シーズンはかなり楽しく過ごさせて貰った。

その代わり、入学してから地獄な訳だが。

「ま、詳しい事はひよりちゃんに聞きなさいな

言つて、氷澄が立ち上がる。

「最後にひとつ」

「んー？」

「その…妖怪とか何やらと、俺も戦うのか？」

「そりゃ本人の意思でしょ、強制したって何の意味も無い」

本人の意思、か。

「なぜ戦おうと？」

「……当ててみなさい」

ニヤリと笑い、階段方向へ。そのまま氷澄は消えてしまった。

「…………戦闘狂つて訳でも…………いや否定できないのな」

かくして放課後、しつこくカラオケ行こうと誘つてきた友人を振り切つて4階まで登り、図書室への扉を開ける。ひとつ上の階を丸々使つた巨大な部屋にこれでもかと本を詰め込んでいて、所蔵量は大学レベル。放課後は勉強したい生徒がちらほら現れる。あと最近の学内図書室に見られる傾向として、ファッション誌やアニメ情報誌が一番目立つ位置に置いてある点が特徴、ライトノベルも相当数貸し出し中。

今日は定期テスト前でもないので勉強している生徒はおらず、読みたい本を探す眼鏡つ娘と、携帯ゲーム機で通信対戦に興じる男子2人がいる程度だった。特に仕事もないようで、図書委員も読書に没頭している

「……ふむ……」

あの図書委員は有名な図書委員だ、黒いストレートの髪と整った顔の作りで入学式当初から目立ちまくり、学園のマドンナ（80年代）とか学園のアイドル（90年代）とか俺の嫁（00年代）とか呼ばれている。要するに美人な訳だ。

木花 咲夜、1年、植物資源科。

まあ美人なだけで本来なら関係無い事であるが、大悟の目的地へ通じるドアは彼女の背後だ、話しかけて中に入る許可を貰わなければならぬ。

ゆっくり歩いてカウンターまで移動、向こうもそれに気付いて顔を上げ、途中で本を持つていらない事に気付く、バーコード読み取り機を元に戻した。

「えー…その奥に来いって言われて来たんだけど」

「あ、はい。白兎大悟さんですね、承っております」

根回しはしてあつたらしい、言つてすぐに笑顔になり、机に貼つてあつた紙片を剥がす。代わりに呼び出しベルを置いて、椅子から立ち上がった。

「 もう少しで『ひかり』に来ると思っていますから、それまで中でお待ち下さい」

図書資料室のドアを開け、カウンターの内側へと誘導される。初めて入ったが大方の予想通り本だけで、4面ある壁のうち2面が本棚で多い隠されており、中央にはパソコンの乗ったテーブル。左の壁にはもうひとつドアがある、この先に部屋などあるのだろうか。

「 18分遅刻」

そのドアの横のソファ、焦げ茶髪の女生徒が読書に勤しんでいた。

「 .....ホームルーム終わって1分でどうやって来いつて？」

「 無理じゃないでしょ、ダッシュしなさいダッシュ」

「 授業終了5分前に帰り支度始めるタイプだらお前」

「 .....何か問題でも？」

とりあえずバッグをテーブルに置き、氷澄側の丸椅子に腰掛ける。足組みながら読んでいるのは小型のハードカバーで、表紙にはタイトルしか書いていない、何の本かは計りかねた。

「 まあ、逃げずにちゃんと来た点は褒めてあげる。性格からしてすつぽかすと思つてたんだけど」

「来るだけはな、その先はまだ未定だぞ」

「えーえーわかってるわかってる」

本から皿を離さないまま答える。氷澄さんは皿と違つて上機嫌なようで、笑顔が不敵でない上に声も軽い、何かいい事でもあったのか。

「一人あたりの仕事量半分…給料据え置き…ふふふ……」

「どうやら良からぬ事のようだ。」

「粗茶ですが」

「あ、どうも」

緑茶を出す木花咲夜、その後大悟の隣の席に氷澄用も配置。お盆を片付けてから、図書委員の仕事に戻るためか部屋の出口へ。

「どうぞ」ゆくゆく

出ていった。

「……メンバー構成とかどうなってんの？」

「今のところ戦闘要員は私だけね。あの子は教育中だけど戦闘にはまったく向かないし、ひょりちゃんはオーバースペックだし」

ああ、マイラブリー・エンジェルさくやたん（10年代）も既に人間を辞めていたか、その情報が全校生徒に知れ渡つたらどれだけの人間が暴徒と化すだろうか、まだファンクラブとかは設立されていないようだが。

しかし、じく一部の方々は萌える、絶対に。

「一人でやつてんの？」

「今はね、運がよければ今日中にもう一人増えそうだけど」

「…………」

「いや別にじくちでもいいわよ、真剣に困つてる訳じゃないし」

ぱたりと、読んでいた本が閉じられる。

「強制できる類のもんじゃないしね、肉体的にも精神的にも」

笑顔

これと同じ顔が不敵に歪んで大剣振り回してきたとは、女というの  
は恐ろしい。

「………その件について午後の授業中考えてみたんだが

「ん?」

「妖怪やら何やら言つても、それがそのまま…実体化?してゐる訳じや無いんだろ」「

「例外除く。すば抜けて高位な神様ならそのまで降りてこれるし、その逆の場合でも怨念自体が肉体を持つ事もあるナビ。まあほんどうは」想像の通りよ」

「つまり、相手も俺らと同じ」

「や、生身の人間」

喫茶店で飲み物を頼む時くらい軽い口調で、その単語は発せられた。

言つた直後、氷澄の顔には脣の不敵さが戻り、ソファにもたれ掛かつた体勢も相まって見透かされた気分になる。考へてる事は全部わかるとも言つて来そうだ。

「……相手が人間で…それを？」

「言つたじやない、斬り殺すって」

「…………」

「だから絶対に強制できない。法律上の罪なんていくらでも揉み消せるけど、精神面でそれを許容できなければ戦わせる意味は無い」

それでも誰かはやらなきゃいけないんだけどね、と付け足し、ソファから丸椅子に移動した。緑茶入りの湯呑みを左手で引っ掴んで、中身を一気飲み。

「殺さないといけないのか？」

「放置したら三桁単位で死人が出る」

百を守るために一を殺す

よくある話だとは思つていたが

「でも、拒否するんでも話だけは聞いてくよつ」と、どうかしきり、あなたはもう人間の枠組みから外れてるんだから

「……ああ……」

「ああ、来てくれたか」

重い話に区切りをつけ雑談すること数分、目立つ赤髪の国語教師が入ってきた。職員会議の後すぐ来たらしく普段生徒の目に入らないような冊子を携行し、ついでにテストの答案も持ち込んでいる。ここで仕事するようだ。

「どうだ? どこまで説明した?」

榎原はまず氷澄にそう問い合わせながらテーブルに紙束を置く。そして問われた氷澄さんが親指を立て、先端を奥のドアへ。

「とりあえず実地研修」

「やうか

少し待つていろと言いながら奥の部屋に消えていく。氷澄はお茶のおかわりが欲しくなつたらしく急須へ寄つていき、ついでに置かれた紙束を覗き始めた。

漢字のテストだつた、1週間前に大悟も受けている。普通に授業を受けていれば何の問題もないが、満点を取るのは恐らく無理だろう、あからさまな満点阻止問題が混ざつていたのだ。

漢字に直せ

『まひ』・つわせだらけの衣類のこと

アホかと思う。

「赤ッ！？」

目的のブツに達して何か見てはいけないものを見たような顔になる氷澄さん。色的にも評価的にも真っ赤つ赤だったのであらう、膝について轟沈していらっしゃる。

赤い点数を取つた場合は何があつたか。確か書き取り100回とかそんな小学生レベルの課題を出された気がする。

「つーー！」

「ー？」

鋭い目つき（泣）で睨まれた。

「…………もしかして……勉強時間削られてたりするのか……？」

「そりゃ……いや……あなたには関係ないわ、うん」

無理矢理笑つて首振りし雑念を振り払つ。相当無理してるようでなんかもういたたまれなくなつてきたが、与えられた情報を統合すると大悟に手伝えるかというと何とも言い難い。誰だつて殺人などやりたくないのだ、例え最近の危険な若者であつても。

結論を出すにしても実地研修とやらを終えてからで

……実地研修？

「待たせたな、こいつちだ」

いつの間にか背後に赤髪が立つっていた、準備完了らしい。

「とりあえず我々が何と戦つて何を阻止しているか見て欲しい

「…………相手は人間つて聞きましたが」

「そうだな、だが完全に生身の人間という訳でも無いんだ」

奥に招かれる。

倉庫、いや倉庫ではないかもしれないが、少なくとも大悟には倉庫に見えた。使つていな道具や資源を備蓄している場所は普通倉庫と言つだらう、それと同じだ。

右、刀剣類

左、銃器類

正面、物資、メンテ具、弾薬

「危ねえええええええええええええええええええええええええええツ！…………！」

「声がでかい……」

後ろから蹴り倒された。

「各所に話はつけてあるから合法じゃないけど違法でもない、だからって騒ぐとバカが忍び込む可能性が出んの、オーライ？」

「お… オーライ……」

改めて室内を確認、大別してまとめると、保管してあるのは剣、銃、消耗品。どれを取つても殺傷能力は高そうだ。刀剣類は氷澄のものと同じようなファンタジックな代物中心で、基本的に日本製、ちらほらと西洋風が混じつている。そのすべてがあのチェーンソーのよ

うなお花畠な能力を持つているんだろう、よく見ればチエーンソーも安置されていた。

そして銃器類、拳銃が数種類端に固まって壁にかけられている。大悟がわかるのはここまでだ、後は何か「ゴテゴテしたのが並んでるようになら見えない。

「これ、流通は……」

「火器は中古か、試作品だな。残念ながら最新の制式装備は手に入らないが、性能だけならなかなかだぞ」

例えは、と言いながら銃コレクションに歩み寄り、そのうち1丁を持ち上げる。まず第一に大きく、弾倉が2つついていた。側面のジョイント部分から察するに2丁の銃を接続したもののように、上部にも何かの電子装備を追加、いわゆるハイテクというやつだ、ここ数年で開発されたものだろう。

「XM29」

「…使えと？」

「いや、これは少々重すぎる」

XM29とやらを壁に戻し、反対側の壁、刀剣類から日本刀を1本選出、こちらへ渡してきた。

「とりあえず護身用として持つていてくれ、宿らせた神の記憶が多少は流れ込んでいるだろ?だからただの素人よりは扱えると思つ」

細い刀身だがズシリとくる、やはり模造品ではなく本物だ、これを振り回すとなるとかなりの腕力がいる。

などとやっているうちに氷澄さんはこっちの数倍重そうな大剣を持ち、何かでかいリボルバーみたいなのを壁から取り上げ腰に装着、ダイエットつてレベルじゃない。

「別に筋肉ムキムキな体じゃないからね。見たい？」

「いえ特には」

「即答…かよ……」

なんか落ち込まれた。

## 見学一回九十里

「出雲へようこひや」

「…………何が起きたし」

生い茂つた木々、石畳の参拝道、巨大な社。まさしく出雲大社だ、  
日本で一番有名な神社である

なぜこんなことになってしまったのか、それを語るには30秒ほど  
時間を遡る事になる。

榎原氏は討伐すべき対象の中から危険度の低い相手を選別してくれたようだ、何でも対象の境内侵入を阻止しろとの御達示らしい。大悟に向かつて喋っていた訳ではないのでどこの国境かは聞き取れなかつたが、なるほど、我らが日本神話総本山だつたか、浅間神社くらいにしてくれればよかつたのに、学校の近くにひとつあつただろ確か。

それで問題はその後だ、直径20センチほどの青銅で形取られた鏡が出てきた。そこからの経過を単純に現象だけ言うと、光を反射するための鏡が生意氣にも自ら発光し始め、重力を無視して2メートルほど浮上、「構成記憶」とか「分子化システム起動」とか「弾道計算開始」とか榎原が呟いた後、「発射」の一聲でホワイトアウト、気付いたら鳥取の石置に寝転がっていた。

「大事な事なのでもう一度言おう、何が起きたし」

「ひよりちゃんからのエネルギー供給をオモイカネ経由の制御で安定させた物質転送システム、だつけ？」

「なんじやそりや……」

「ブラジルまで2秒で行けるんだって」

「…………マッハ454かあ…………」

とりあえず石から尻を離し、横にあつた狛犬の頭をつついてみる、本物だった。

「で、どうすんの？」

「あの鳥居を越えられたら私の負け、その前に仕留められたら勝ち。今から観戦してもううから」

「応援していやいいの？」

「黙つて眺めてなさい」

言つて、氷澄は札を一枚取り出した。昼に保健室で触られたあの札だ、結構なスパークを受けるのは大悟だけだろうか、ピンセットで摘んでたあたり神原も怪しい感じだが。

その札を2回ひらひらと振つて、それから手を離した、重量に従つて落ちていく。

「つーん、町の方でぶらぶらしてんのかなこれは」

「……今何やつた？」

「説明すんの面倒だからカットで」

「酷い

氷澄が見ていく方向へ視線を向けると、神社出口、その先の出雲市市街が見えた、目標はあそこにいるらしい。普通ならそのまま歩いて出していくのだが、剣とか銃で武装してる訳で

「武器はとりあえずここに置いといて」

と、道から外れた茂みの中に大剣と巨大リボルバーを放り込んだ。

「大丈夫なのかよ？ いきなり必要になつたりしたら」

「大丈夫大丈夫」

枯れ枝等でうまく武器を隠した氷澄は次いで携帯電話を取り出し、メールを打つこと一分、出口へと歩き出す。

「あ、観光したい？」

「そうだなあ、隣にいるのがもつちよつとモテル体型に近かつたらそういう気分にもなつたんだろうがなあっ…………！」

言つてる途中でつねられて脇腹に激痛が走る

「…………まあここにはよく来るから見たい時に見ればいいわ

全体の半分ここ、といいながら道を降りていく。どうやら次あるかもわからない段階だというのを忘れてるようだ、鳥頭、声に出したら殴られるだろうか。

しばらく歩いて川を越え町の方に出る、日が傾いて来ている上に平日なので参拝客はそれほど多くなく、静か、というか閑散としていた。不景気の影響だろうか、夕日に照らされて下校する中学生が数

人いるのみ。後はまあ、名前も知らない虫が鳴いているくらいだろうか。

「場所わかんの？」

「大体は」

分かれ道の度に札をひらひら振つて、数秒悩んだ後に再び歩き出す。どうやらあれで探知できるらしい、説明は拒否されたが、恐らく氷澄自身の能力とやらで間違いないと思われ。

日本神話についてはあまり詳しくはないものの、神の総数は八百万、現存する物語に登場するのは100ほどで、そのうちの戦神を抽出するとなると、スサノオとかタケミカヅチとかほんの数柱まで絞られてしまつ。まして女性となると探し出すのも難しくなつてくるはず。

となると

「もしかして今、魔法使いが銅の剣装備してる状態？」

「……時代はマルチロールよ」

びつやから図星らじー

「まあ、ちゃんとした前衛がいてくれれば専念してもいいんだけどねえ」

「へえ——」

「…………くつ……」

あからさまにすっとぼけると、苦笑いと薄笑いの混じった顔をしながら札を振る作業に戻った。そのまま数秒歩いて、今度は止まる。

「…………反対側？」

「何が」

反転、疾走

「ナメんなや！」ぬああああああああああああああああああッ！――！」

行ってしまった

「…………つてちょっと待て置いてくな迷子になるだろがああああ――！」

狼少年は助けて貰えない 1

名前：白兔大悟  
年齢：17  
状態：迷子

「勘弁してくれ……」

あの疾走速度は絶対に人間の限界を超えていた、簡潔に表すなら『ウサイン・ボルトがトップスピードでトラック5周』といった所だ。まあ、数秒間とはいえそれに追従していた大悟もいろんなステータスがカンストしているような気もするが

こんなことになるなら携帯番号聞いとけばよかつたか、いやそれもそれでめんどくさそうだ。幸い出雲大社と出雲市駅の大鳥居は見えているので、あそこに戻つて待つか、最悪新幹線で帰宅することもできる

とりあえず、見失つてからそつ時間はたつてない、後々付けられるであろう言い掛けりを受け流すため捜索だけはしておこう

「すいません、鬼のような形相の女子高生がどつち行つたかわかりませんか」

「ああ、あつちに行きましたよ」

鬼のような云々だけで通じるとは正直思わなかつた、やはりあの速度は目立つてゐるのか

爽やかな笑顔の青年にお礼を言つて小走りにそつちへ向かい、ホテル街に入り、数秒見回してシターンする。これは違う、何がかはわからないが本能がこつちぢないと叫んでゐる、といつよりは、制服姿でそこをうづうづくのは危険すぎた

「見つかりませんでしたか」

爽やか青年が話し掛けてくる。さつき道を教えてから数十秒、教えて道を逆走されたらそりや結果を聞きたくもなる。が、さつきの位置から一歩も動いてないつてのはどうかと思いつ。

「あの速度じゃ追いつくのは難しいでしょう、何か別の方法を考えないと」

「いやいいんだ、捗したってこう事実が重要なんでな」

「はははは」

となるとどうするべきか、安全策を取るなら出雲大社で待ち続けるべきだが、あの様子では氷澄が帰つてくるまで時間がかかる、最低でも数十分の暇潰しが必要だろう

午後5時、夕食には早いがそういう『え』がアレだった

「そう思い付いた途端に腹減つてくるんだからな……」

「なりすぐそこの出雲そば屋がありますよ」

とてもイタリアンな感じの料理が出てきた

「…………」

出雲そばとは蕎麦の実を殻ごと挽いた粉で作った麺で、郷土料理三大そばに数えられるとか何とか言う説明書きがあり、実際その通りの麺が出てきたが、めんつゆには確實にトマトが入っている、それを煮詰めて煮詰めてドロドロにしたらしく、10人に『これは何か』と聞いたら口を揃えて『スパゲッティ』と答えるだろう

「何この…何?」

思わず呟いた

「創作そば」

聞こえていたらしい、テレビの前に陣取った女性店員が短く返答。なお、店内にいる人間は大悟とその店員2人のみである

「出雲そばを頼んだつもりなんですが…」

「…………創作出雲そば」

恐らくメニューなんて存在しないのだろう

「まあ……」

食えるものならなんだつていい、そう思い込んでイタリア風出雲やばを口にする。見た目はアレだが味は案外……いややつぱアレだ

なんといつか茹ですぎである、パスタは固めに仕上げるのが基本といつ性質上、例えそばにとつて最高の茹で具合だとしつてもくつた感しか残つていらつしゃらない

「ふむ… やつぱぱ合わないか」

「やつぱと申されますか」

「もしくは味噌煮込みスパとか……まあいいわ、おフランス製エナジーバーをあげよつ」

銀色の包装がされた棒を投げて寄越した

「代金もいらない、気が向いたらまた来なさい

手をひりひりと振つて、以降テレビから目を離す事は無かった。どうやら本当にタダでいらっしゃい、代金取られたらそれはそれで文句言つただろうが

引き戸を開けて外に出、振り返って店名を確かめる、喫茶店『ストライクイーグル』、前衛的すぎた

「おや……？」

「ん？」

声につられて後ろを向き、先程の青少年がいるのを発見、なぜか妙に汗ばんでいた、息も上がっているようである

「口に……含じませんでしたか……」

「口に含ひつてレベルじゃねえな。それでビリした?」

「少し鬼ごっこをね……」

そんな全力でやつたのかと

「捜し人は見つかりました?」

「見つからねえから出雲大社戻つてよつかと思つてた所だ」

「まあ、それが妥当でしょうね」

実際問題氷澄がどこに行つたかまつたくわからない、なら早めに戻つておいた方がいいだろう、もしかしたらむづ待つてている可能性もあるし

まさか先に帰つてたりとかはしていないと思つ、さすがに

「出雲大社ならこっちから行くのが近道です」

「さうか」

示された道を確認し、足を動かしてそっち方向へ

と

3歩進んでそこで止まつた

「.....」

「おや?」

「.....」

「うん?」

どうしたのかわからない、といつ顔だ。どうせ演技だら、地元民であればこの間違いはありえない

「.....出雲駅と出雲大社は一直線の通りで繋がつてて、それぞれに  
大鳥居が立つてんだ」

「はい」

「これがまたバカでかくてだな、相当遠ぞからぬ限りビニからでも見えるんだ」

「そうですね」

あれ、と指差す。巨大な赤い鳥居が2つ、数多の家屋を乗り越えて突っ立っていた

「そして今お前が教えた近道」

指を反対方向へ

「悪いが俺には近道とは思えない」

「…………」

青少年は笑顔のままだった

思い返せばそ�だ、ホテル街への誘導、美味しいとは言い難い店の紹介、完全に正反対な事を教えてきている

であるならば、この道を行つたとしても出雲大社に着くとは考えられない

「お前……」

動きは右の方であった

「はあ……はあ……やつと追い付いた……」

身長160cm前半、茶色い短髪、高天原高校指定のブレザー

ウサイン・ボルトも真っ青の速度で大悟を置き去りにし以降のこうなる元凶となつたマジカル（？）女子高生、武内永澄さんである

距離10m、町中走り回っていたのか、フルマラソン直後のような疲れよつ

「ううとこあつちうううといひうんしづらう手間かねさせやが  
つて……」

「え……いやそんな動き回つてはいない……よつな……」

ここから100m以内でたむろしていただけとは自信を持つて言える、それをあつちううちと言うかどうかといふ話だが

「覚悟……できてんでしょうね……」

返答は、暗転だった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7271q/>

緋天日蝕 狂乱ノ蒼月

2011年10月5日22時15分発行